

国際的に活躍する人材育成を目指す文部科学省指定の「スーパーグローバルハイスクール(SGH)」。県内で唯一、2014年度に指定された済々黌高(熊本市中心区)では、英語によるディベートや環境をテーマにした課題研究に取り組み、世界に向けた視野を広げつつある。

スーパーグローバル高に指定 済々黌

「ごみのポイ捨ては学校の評判を落とす。厳しい罰を与えるべきだ」「ポイ捨てが故意かどうかの判断を間違えば生徒が学校に不満を持つことになる」

③コミュニケーション能力④批判的思考と創造力①の4点を「国際的素養」と位置付け、英語力だけでなく地域やグローバルな課題に向き合い、その素養を培う。

2月中旬、校内で開かれたSGH中間報告会。生徒らは肯定側と否定側に分かれて英語で討論する「即興型ディベート」を実演した。その場で与えられたテーマは「学校はポイ捨てした生徒を停学にすべきか」。指導する英語科の鶴濱正悟教諭は「自分の考えを堂々と表明できるようになった。目覚ましい成長だ」と目を細める。

井上敏弥主幹教諭は「知識偏重では世界と渡り合えない。これからは自分で課題を設定して解答を導き出し、それを発信する力が必要」と強調する。

SGHは5年間の指定。①国際感覚②課題設定・解決力

具体的には1年生に希望者を募り、ディベートは昨年6月から49人が、課題研究は11月から41人が取り組んでいた。

① 回。基本的な流れや英語の表現方法を押さえたほか、イン

ディベートの講座は全9

国際人へ 素養培う

スーパーグローバルハイスクールの中間報告会であった即興型ディベートで、意見を戦わせる生徒たち
=熊本市中心区の済々黌高



英語でディベート 環境課題に研究

ターネット電話で東京やスイスなどと結び、第一線のビジネスマンや弁護士などから多角的な視点で環境問題を学んだ。

ディベートは大半が初めての経験で、当初は言葉が出ずに泣きだす生徒も。桐葉千花さんは「日本語で考えても難しいテーマ設定。論理的に考え、表現するのは大変」と痛感。矢野瑠智慧さんは「賛否両方の議論を通じ、一つの物事についてさまざまな視点で考える力が付いた。日ごろ接するニュースなどへの見方が変わった」と手応えを語る。

課題研究は「開発と地球環境保全の在り方」を主題に、8グループに分かれて「環境にやさしいごみ処理」などを研究した。海外からの留学生が多い立命館アジア太平洋大(別府市)を訪れた際は、留学生らと意見交換。各国のごみの分別法を調べるため、英語で留学生に突撃取材するなど積極性を発揮した。

淵脇萌乃さんは「先進国と途上国の経済格差など知識としては理解していた国際問題を、肌で感じる事ができた」と話す。

14年度は1年生を軸としたSGHの取り組みは15年度、対象を新1、2年生に拡大する予定。このうち新2年生はSGHのクラスを1学級置き、特化した授業を週4時間実施。このクラスが3年生になった時点では、英語の論文作成に挑む計画だ。

「ディベートなどを通じ、相手の立場で考える習慣が身に付きつつある。今後が楽しみ」。井上主幹教諭は、生徒らの2年後の成長に期待を膨らませる。(福井一基)